

SHOW HEYシネマルーム

★★★

オーバー・エベレスト 陰謀の氷壁
(氷峰暴/Wings Over Everest)

2019年/中国・日本映画
 配給：アスミック・エース/110分

2019 (令和元) 年 11 月 15 日鑑賞 TOHOシネマズ西宮OS

Data

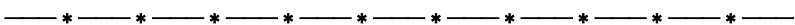
監督・脚本：余非 (ユー・フェイ)
 製作：張家振 (テレンス・チャン)
 出演：役所広司/張静初 (チャン・ジンチュウ) / 林柏宏 (リン・ポーホン) / ノア・ダン
 ビー/プブツニン/ハバック・ハーキー/ビクター・ウエプスター/グラハム・シールズ

みどころ

渡辺謙がジュリアン・ムーアと共演してハリウッド進出なら、役所広司は張静初 (チャン・ジンチュウ) と共演して中国へ! 「ヒマラヤ・サミット」が開催される中、彼がヒマラヤ救助隊の隊長として山頂近くのデスゾーンで挑む過酷な任務とは?

『ジョン・ウィック』シリーズにおける、ガン・フー、カー・フー、馬・フー等を含めアクションは多種多様だが、「ヒマラヤ・アクション」は史上初! しかし、あの高さ、あの雪と氷の中でホントに拳銃をぶっ放していいの? また、あの気象条件の中で峰の合い間にヘリを飛ばしても大丈夫なの? そんな心配の中、どんなストーリー、どんなアクションが?

もっとも、私の最大の注目は久しぶりにみる第2の章子怡 (チャン・ツイイー) と言われた美人女優チャン・ジンチュウだったが、アレレ・・・。



■渡辺謙がハリウッドなら、役所広司は中国で! ■

本作と同じ日に観た『ベル・カント とらわれのエアリア』(17年) の話題が、日本が誇るハリウッドスター渡辺謙とハリウッドの大女優ジュリアン・ムーアとの共演なら、本作は日本映画を代表する名優・役所広司と、章子怡 (チャン・ツイイー) に続いてハリウッド進出を果たした中国の名女優・張静初 (チャン・ジンチュウ) との共演が話題。さらに、本作は香港からハリウッドに進出して、『レッドクリフ Part I』(08年) (『シネマ 34』73頁)、『レッドクリフ Part II』(09年) (『シネマ 34』79頁) 等のヒット作を多数手がけたプロデューサーである張家振 (テレンス・チャン) の製作だから、台湾の林柏宏 (リン・ポーホン) も共演しているうえ、カナダからの出演陣も多く、国際色豊かなことも話

題だ。さらに、本作は何と自分自身がモンブランやエベレストに登頂している登山家であるとともに、ゲーム会社 Gameloft 社の元中国グローバル副総裁という経歴を持つ中国の余非（ユー・フェイ）の初監督作品というから、ビックリ。

エベレストにまつわる物語と映画はたくさんある。近時私が観たものだけでも、『エベレスト 3D』（15年）（『シネマ37』82頁）、『エヴェレスト 神々の山嶺』（16年）（『シネマ37』86頁）、『フリーソロ』（18年）（『シネマ45』未掲載）等がある。それらを含め、彼はパンフレットにある「ユー・フェイ監督に影響を与えたエベレストにまつわる実話」に書かれている通りの「心境」で、「史上空前のスケールと映像美で贈るスペクタクル・エンターテインメント」たる本作を完成させたわけだ。

ちなみに、本作は中国歴代最高の興行収入約1000億円（56億元）を達成した映画『戦狼2 ウルフ・オブ・ウォー2』（17年）（『シネマ41』136頁）の製作会社である「春秋時代」とテレンス・チャンがタッグを組んだもの。本作は、中国・日本映画だが、原題を『Wings Over Everest』、中国題を『冰峰暴』としているから、最初から中国・日本市場以上にハリウッド市場を意識したものだ。製作費を日本がいくら負担したのかは知らないが、本作で役所広司演じる民間のヒマラヤ救助隊である「チーム・ウィングス」の隊長で、「ヒマラヤの鬼」と呼ばれる男・姜月晟（ジアン・ユエション）は日本人ではなく、「日系人」とされているのもミソ。私には、これはグローバル化が進んだ今の世界状況下では純粋な「日本人」では通用しないと言われているようなものと読めたが、さて・・・。

■□■ヒマラヤ・サミットでの「ヒマラヤ公約」の締結は？■□■

トランプ大統領は「パリ協定」をいとも簡単に離脱してしまった。「パリ協定」は長い間の苦勞の積み重ねの上で、やっと2015年に196ヶ国が締結した「気候変動抑制に関する多国間の国際的な協定（合意）」。

しかし、排出量削減目標の策定義務化や進捗の調査など一部は法的拘束力があるものの、罰則規定はない。その枠組みは、途上国を含むすべての参加国に排出削減の努力を求めると言うものだが、そこでは、いわゆる「先進国」と「後進国」で負担に差があるのが特徴。そのため、「米国第一」を掲げるトランプ大統領の主張は「地球温暖化という概念は、アメリカの製造業の競争心を削ぐために中国によって中国のためにつくりだされた」ということになるわけだ。他方、2008年には北海道の洞爺湖で洞爺湖サミットが開催された。そのため、それが開催されたザ・ウィンザーホテル洞爺リゾート&スパはその後有名になり、多くの観光客を集めた。私も2013年9月の北海道旅行でそのサミット会場を見学したが、それは立派なものだった。

それと同じように（?）、今ネパールのカトマンズでは、ヒマラヤ地域の平和のための「ヒマラヤ公約」を締結するべく多数の国の首脳が集まっていた。しかし、その水面下では「パリ協定」の締結を巡って紛糾したのと同じように、関係各国の利害が対立していた。しかし、その論点は？関係各国の主張は？

その点を追求すれば政治的テーマを含む社会問題提起作になるが、本作はその追求は一

切せず、ある1つのテーマのみに特化している。それは、エベレスト山頂付近に眠る、平和のカギを握るという機密文書だ。なるほど、なるほど・・・。

■□■張静初はもっと美人だったはず？年齢の配慮は？■□■

私が、中国福建省出身の美人女優チャン・ジンチューを見たのは、『孔雀 我が家の風景』(05年)『シネマ17』176頁)と『SEVEN SWORDS セブンソード (七剣)』(05年)『シネマ17』114頁)を観た時。美人女優チャン・ジンチューの印象はそこで詳しく書いているが、そこで私は「中国では第2の章子怡、ポスト章子怡と呼ばれる女優が多いが、彼女もその呼び声が高い女優の1人。今後も次々と出演作が控えているとのことだから、注目しなければ・・・。」と書いた(『シネマ17』177頁)。2005年のベルリン国際映画祭で銀熊賞を受賞した『孔雀 我が家の風景』で一躍脚光を浴びたチャン・ジンチューは、その後『唐山大地震』(10年)での大ヒットを受けて、ハリウッドに進出し『ラッシュアワー3』(07年)や『ミッション・インポッシブル』(15年)に出演している。チャン・ジンチューが目標としているチャン・ツイイーは2019年の第32回東京国際映画祭で審査委員長を務める等、映画人としての国際的な役割を果たしつつ、女優業もしっかり続け、美しい顔とスタイルを保ち続けている。しかし、本作に見るチャン・ジンチューは？

命がけでエベレスト登頂に臨む山男やヒマラヤ救助チームであるチーム・ウィングスの面々が、日焼けや雪焼けを気にしたのでは仕事にならない。それは当然だが、やっぱり女優は美しいお肌の顔を保たなければ・・・。誰もがそう思うが、チーム・ウィングスに参加し、すぐに危険な任務に挑んでいる小袋子(シャオタイズ)(チャン・ジンチュー)が、お肌の美容までケアできないのは仕方ない。したがって、本作冒頭に見る女優チャン・ジンチューの美人度は？男しか入れないチーム・ウィングスに例外としてシャオタイズが入れたのは、きっとジアン隊長が同じ登山家として自分の夢を求めていた亡き娘の面影を彼女に重ねたため・・・？本作はそんなストーリーだから、シャオタイズの正確な年齢は設定されていないが、せいぜい20歳を少し過ぎたくらい。チーム・ウィングスで1番若い救助ヘリのパイロットである韓敏勝(ハン・ミンジャン)(林柏宏(リン・ポーホン))と恋に落ちるストーリーが釣り合うためには、彼より若い方がベターだが・・・。あまり女優の年齢のことを書くと怒られるのでこれ以上は控えるが、1980年生まれのチャン・ジンチューを本作で役所広司と共演させ、リン・ポーホンと恋人関係にさせたのは、ちょっと無理があったのでは・・・？

■□■依頼者は厳選を！カネにつられると？■□■

『ベル・カント とらわれのエリア』でも、ソプラノ歌手ロクシーヌ・コスが危険の多い南米の某国の私的コンサートに出演したのは、結局「カネのため」だった。それと同じように本作でも、ジアン隊長がインドの特別捜査官と名乗るヴィクター・ホーク(ビクター・ウェブスター)とその弟マーカス・ホーク(グラハム・シールズ)からの、エベレス

ト山頂の通称「デスゾーン」に墜落した1機の飛行機から平和のカギを握る重要機密文書を探し出すという依頼を受けたのは、結局カネのため。ヴィクターの話では、「その文書は国家間の戦争を引き起こす可能性があるため、65時間後、カトマンズで開かれるサミットの前に文書を取り戻したい」という話だった。ジアン隊長はこの依頼には何か裏があるのではないかと感じていたが、結局カネの力に負けてしまったらしい。もっとも、用心深いジアン隊長は、オフィスにいるタシ（ブツニン）と連絡を取りながら依頼された任務に挑むとともに、ヴィクターとマーカス兄弟に対しては、「もし天候が悪化したら即中止する」等の条件を呑ませていた。

しかし、弁護士の私に言わせれば、それは単なる口約束だし、ヒマラヤの山頂でそんなことを主張して言い争っても何の意味もないはずだ。弁護士の仕事も依頼者との信頼関係が大切で、それが築けないにもかかわらず多額の報酬につられて働くとロクな結果にならないことが多い。もちろん、百戦錬磨のジアン隊長もそんなことは百も承知だが、本件依頼を受ければチーム・ウィングスの財政難を一気に解消できると言われると、ついその誘惑に・・・。

■□■ヒマラヤ・アクションの是非をどう考える？■□■

本作をプロデュースしたテレンス・チャンは1949年生まれだから、私と同じ年齢。そんな彼の実績はすばらしいもので、香港では『狼／男たちの挽歌・最終章』（89年）、ハリウッドでは『M：I－2』（00年）や『レッドクリフPart I』『レッドクリフPart II』等を手掛けている。近時のハリウッドのアクションは『ジョン・ウィック』シリーズにおけるキアヌ・リーヴスのガン・フー、カー・フー、ナイ・フー、馬・フー、犬・フーが面白いが、本作では世界初の「ヒマラヤ・アクション」に注目！

前述のようにエベレスト登頂を目指す映画は多いが、それらはすべて真剣そのもので、それぞれ命がけで自分の夢に挑戦している。もちろん、本作の「ヒマラヤ・アクション」も真剣で命がけだが、標高8700m地点のデスゾーンで墜落した飛行機の残骸のあるところまでやっとなり登ったにもかかわらず、そんなところで命がけのアクションをド派手に展開するのはチョー異例。そのエネルギー消費量を考えれば、それはかなり非現実的・・・？私はそう思うのだが、すでに還暦を過ぎた役所広司をはじめ、本作では全出演者がそんなヒマラヤ・アクションに初挑戦！

本作のパンフレットには、斎藤綾子氏（作家）の「息せき切る展開の連続に、鑑賞後は走り回ったかのような爽快感」と題するレビューがあるが、あなたはヒマラヤ・アクションの是非を如何に？そこに書かれているのと同じような「爽快感」を感じることができる？私は、標高8700m地点でのヘリの操縦や拳銃の発射はもちろん、ザイルを振り回しながらの殺し合いも厳禁とし、ヒマラヤ・アクションは封じ込めたいと思ったが・・・。

2019（令和元）年11月25日記